

# 山と博物館

第23巻 第4号

1978年4月25日

大町山岳博物館



スイセン

撮影 丸山善久

## 博物館に望む

私の小さな本棚の中に、忘れられない三冊の本がある。大町山岳博物館編の「北ア博物誌」である。それらの本に目を通す時、私たちは、創立三十年に近い山博の生い立ちと、歴史をまざまざと知ることが出来る。

戦後間もない、昭和二十年代中ばの田舎町にとって、博物館の設立は本当に、クリーン・ヒットだったと思う。当時の青年達の夢がそれとあいまった真摯な学究者の熱意と、又これらに応えた当時の為政者の英断が、この「夢の博物館」を生み、自然を愛し、郷土を愛する多くの人々の熱烈な努力が、山博を育て、来たことを知ることが出来る。そして今、山博のこれからを考える時、しきりと、そうした感慨にふけるのである。

青木発電、黒部開発、高瀬電源再開発と、大町タムの建設と……、私たちの身近かな自然は、スキー場、別荘地の開発と共に、大きな変貌を上げて来ている。そうした中で山の使命、対応こそ待たれるものと思う。その意味で、高瀬溪谷の事前学術調査が行われたことは画期的な事だが、その調査を追跡し、それをもとに、これからの自然への配慮や、自然利用の方途をさぐる事が、最も重要な事だと思ふ。高瀬溪谷の再開発利用については、観光的観点に優先して、山博が、何んらかの指針的役割をはたしてほしいと、特に希うものである。この事は、黒部の開発・観光を見る時、まざ〜と思ひ知らされるのである。

私は山博が近い将来に改築され拡充される事を特に望んでいる。そして高瀬溪谷に付属の森林自然公園が併設されたと希っている。そして新しい館の中で、人文科学的分野の充実、文化財・民俗資料の保護がなされ、今迄の活動と共に、特別展会場も持て、山博が本町に大町市の文化事業の中心としての位置をしめ、設立以来のパイオニア精神と夢が、益々高揚されることを心から希って止まない。

(松本 明)

# 野生動物と私

## 浜昇

「ちらとでもいい

真実の素顔を

われに見させよ

それが、どのような相貌を

おびているかを

われに語り聞かせよ

— ジャック・ロンドン(橋本福夫訳)

一九七六年十二月

脇野沢村九双泊では、相変わらず夜の畑泥棒に、チビ母子を含めて三組のカモシカの母子群が参加していた。

猛吹雪の中、チビが母親のそばを離れてアカマツの造林地へ近づいた時、そこを寝ぐらにしている単独の若雄が、「フシュ」の一声と共にとび出してチビを追いかけはじめた。同時に、他の母子群もあわてて上部の林に逃



チビ

「百メートルも続いた追っかけっこが終つて若雄がひきかえしはじめた時、考えられないことが起こった。母親のそばにやっとな逃げこんできた我が子を、何を思ったか母親が猛然と追いはじめたのである。

通常、カモシカ同志の争いの場合、追われた方が追手から若干の距離をとればそれで終りである。しかし、この時は違つていた。雪に足をとられて立ちつくすチビに、母親は角をあて、前足でこずいた。それは、たまりかねてチビが「ペエー」と悲鳴をあげる程、執ようであった。

子別れの季節としてはあまりにも早すぎるし、母親が発情期を迎えているのなら(秋田太平山では、発情期にはあるが子が母親から離れて行動する例を多く見ているので)、母親により添う雄の姿が見あたらない。翌朝、山へ入ってびっくりした。チビが隣の母子にくっついて行動しているのである。

一九七七年二月、訪れた下北は近年にない大雪とかで、交通は途絶してしまつた。畑も深い雪の下となりカモシカの足あとすらなく、ここに定住する三つの母子群はそれぞれの寝場所を中心に狭い範囲の行動しかとつていないようだ。

十二月、母親から離れて隣の母子群と一緒に行動していたチビは、あれほどいじめられた十二月のことが嘘のように母親のもとにかえり、親子仲睦まじかった。

一九七七年四月、荒れ狂う春の嵐が、海峡からしよっぱいしぶきまじりの突風を柏と樺の混交する疎林に吹きつけていた。ぬぐつて

もぬぐつても、カメラとメガネは白っぽい塩をふき続け、使いものにならないのが口惜しかった。私は下北半島の小さなはり出し、北海岬の尾根に座つて、先刻から二頭のカモシカの子が追っかけて角つきあいしたり、嵐の中一心不乱に遊んでいるのを眺めていた。一頭はとがった永久角をすでに額の上に三、四センチのぞかせているのにくらべ、一頭はやつと丸っこい仮角が、毛の間に注意しなればわからない程度にみとめられるだけである。顔つきも異なれば体格にも差があつた。

十二月、母親からはなれて隣の母子群と一緒に行動し、二月には母親の傍に戻つていたチビが、ここ三日ほど、また母親のもとを離れ隣の母子群と一緒に行動しているのである。かつて、秋田で観察できた双子の例をのぞけば、今まで観てきたどの母子群でも、子が親を離れて他の母子群と行動を共にするということはなかつたので強く興味をひかれて、なるべく継続して観るつもりだつた。

六月末訪れた時はチビの姿は見あたらず、畑でチビを最初に追つた若雄の死を聞いただけだつた。都合で、その後下北を訪れる機会もないまま年を越してしまつた。

明けて一九七八年一月に訪れた時、チビにとてもよく似た若い個体を見つけ終日追つてみたが、変化の多い成長期を見逃したため識別のしようもなかつたし、チビの母親はちょうど一年前に見たチビをつくりの子をつれて、九双泊の金網に囲まれた集落をはさんだむこう側の山へ引越してあり、夜畑に出てきてももとの北海岬には戻らず神社裏の山へ帰つて行つた。岬を捨てたようだ。

しばしばチビの母親がわりをつとめてくれた成雌は、チビと遊んだ前年度の子によく似た若い個体と五十二年生まれの子と一緒にひきつれて、チビの母親が去つた二家族ぶんのホームレンジをのんびりと遊動していた。もう、変わりもののチビの行動を追うすべを失なつてしまつた今、なすこともないが、



オンブダッコする仔だめき

北海岬で毎年三頭生まれてはどこかへ去つて行つたカモシカの子どもたちの中で一番成長が遅いくせに、体が倍もありそうな単独で徘徊する流れものに体ごとぶつかつて追いつたチビ、謎をいっばい残して去つていったチビは、これから先も忘れえぬカモシカの一頭になりそうだ。短かい期間であつたが、人間は畑に柵を作り、若いカモシカたちは去つていき、それぞれの消長を思いながら春三月、出合うこともないであろうチビにまた会いに行く。

一九七七年九月

某山中で年若い友人と、ゴミ捨て場に集まる狸の撮影をしていた。九月の夕刻四時の陽はまだ高い位置にある。煙をあげてぼうぼうと燃えるゴミに残飯を求めて、子狸たちが三々五々姿をあらわした。燃えさかるゴミのすきまから狸のお頭つきの骨をもつて逃げる奴ググ、ケヘン、ケヘンと煙にむせびながら、必死になつて一本一本スバゲティナポリタンを喰つている奴。身の危険のある山火事なら別として、巷間言われている「野生動物は火

を恐れる。というは狸に限り肩つばもの  
ようだ。

ゴミ捨て場での撮影は周辺の大掃除からは  
じまる。タヌ公たちが前夜、おもちゃとして  
ひきずり移動させたダンボール箱をひろい歩  
き、ビニール袋、プラスチックの容器のとり  
かたづけ、そしてほうきを使ってごまごまし  
たゴミのはき清めに終るが、時にはこんなハ  
ブニングもある。

若く茶目ツ気の多い友人が、  
「浜さん、やるべえ。」  
と声をかける。

「なんだ。」  
とふりむけば、むくつけき男が手にいっばい  
のヤマシロギクとシオンをかかえてニンマリ  
立っている。

やがて汚れの目立ったところに植えはじめ  
た。友人に造園やさんを持っているからでも  
あるまいが、自然に生い茂っているかのよう  
なできばえだった。見落としてしまったタバ  
コの吸いガラが写っていて、あとで歯ざしり  
するようなどがよくあるが、これなら大丈  
夫という彼の自信を信じてやってもよいと思  
うほどになっていた。

蕪村に「子狐の隠れ顔なる野菊かな」の句  
がある。狐や狸が相手から身を隠す場合、た  
った一本のスズキやヨモギの茎を顔の正面に  
据えて、隠れたつもりでじつとしていること  
がある。民話に登場する木の葉でチョンも、  
案外、こんなところからきているのかもしれ  
ない。実際に、ちっぽけなスズキが隠れみの  
となつて彼らの姿を見つけないことがある。  
これならタヌ公も姿を隠したつもりで野菊に  
並んでくれるだろうと、内心北斐笑んで待つ。  
ところが、トコトコ出てきた二匹の子狸が  
植えた野菊のにおいをチョッチョッと嗅いだ  
のもつかの間、ためらいもせず、くわえては  
ひき抜き、そのセットを全部片づけてしまっ  
た。あげくのはて、車の中から撮影している  
彼が、ドアとレンズの間に敷いてクッション



養するムササビ

いう便りが届いている。  
笑ってつきあつたタヌキ  
の次には、暗い気持で会  
いに行かなくてはならな  
いタヌキたちがいるので  
である。  
どれだけ経つたらろう  
か。酔いざましに外へ出  
てみると、遊び疲れたの  
か、一匹とり残されたよ  
うに子狸が座っていた。  
遠吠えはまだ続いている。  
子供の頃、鴨緑江で別れ  
た朝鮮狼ヌクテの夢でも  
見ながら寝るとしようか。

一九七七年十二月

じつとしていろいろという親父の声を忘れて、  
興奮した娘は、三分もすれば、ささやきが大  
声にかわるこのくりかえし。やつと、かや  
の樹洞からムササビが顔を出した。照明の光  
をきらつてか、いったんひっこんだが、空腹  
に耐えかねたというふうには、グググルと  
ふた声なくと、思いきりよく全身をあらわし  
て、幹をよじのぼり、枝づたいに隣のすだじ  
いにうつつ。ほかんと大小の口をあけて上向  
く三人に、麻の実状の糞がバラ、バラ、バラ  
と落ちてくる。娘は大喜びだ。

もうすぐ四歳になる娘をつれて、十月の二  
週間ほどを、山口と九州の狸を見に行つてき  
た。その疲れがでたのか、帰宅後、四、五日  
保育園に通つたと思つたら、急に発熱し、肺  
炎と診断されて真夜中の入院さわぎ。退院後  
も二度ぶりかえして、やつと落ち着いた今夜  
親子三人全快祝いに丹沢のムササビをたずね  
てみた。

隣のいびきで眠れぬまま、コロコロ太った  
山の「倅狸」にひきかえ、瀬戸内海の小島  
の「あわれ狸」に思いを馳せていた。高校時  
代をおくつた防府市の天然記念物指定地向島  
では、タヌ公たちが絶滅にひんしているとい  
うのに、少しはなれた大島では、みかんの食  
害獣として、今、大虐殺が行なわれていると

下方のやぶつばきあたりから、ギギーグル  
ーッと別の声がとどくと、たつぷりと夕方の  
おつとめを頭上に見舞つてくれたやつが、む  
こうの声にこたえるように肩を左右にふりはじ  
めた。

「野垂子、とぶぞ。」  
白いチリとりが闇に浮いた。  
「とんだあ。」

と、ため息まじりの声が肩車からもれたとき、  
つばきの樹幹がゆれた。頭の上では、あそこ  
まで行くとせがむ。近寄つて見ても姿は見え  
ない。つばきのつばみをかじっているらしい。  
ポツン、ポツンと音だけだ。  
まだ居たいという子に、巣穴でねぼけてい  
るアオゲラをのぞかせて、やつとこさ、寝る  
時間を納得させ、林道にとめておいた車にか  
えつてみると、余熱を募つてか、ノラネコが  
エンジンの下にうずくまっていた。  
ちびは帰つたらふとんの上でムササビとび  
をやつてみせてくれるという。

昨年暮、山岳博物館から、野生動物と私の  
題で何か書けとお便りをいただいた。承諾の  
返信をしたためたものの、いざ書く段になつ  
て苦しんだ。

動物たちと私のかかわりは一体、何だらう  
か。わからないのである。仮装の合理主義に  
よしかかつて過ごすことの多い都会生活で、  
日々失なつてゆく野性を、野生動物の生活を  
のぞくことによつてとり戻そうとする私のエ  
ゴなのだろうか。

幼い頃、どうしても見つけることができな  
かつた野の動物たちの謎ときを、今もなお、  
宿題としてぶらさげて、あちこちほつつき歩  
いているのだろうか。

いや、ちよつとキザではあるが、やがて母  
親になるであろう小さな娘に語つてやる野の  
生き物たちの物語を読みに行くことが本音か  
もしれない。

何事も位置づけをしなければ気のすまない  
社会にあつて、「ポクつて、なあに」と座標  
におのれをさがしてみたが見あたらない。野  
性との出会いの旅に、私自身との出会いを求  
めた座標のない男の、動物への旅日記から思  
いつくまふ二、三をとり出してみた。

(写真家)

# 文明から遠い人々

## ヤノアマ族

堀 勝 彦

一九七四年七月。オリノコ河上流一帯は雨期のさなかで、来る日も来る日も雨に悩まされながら、岸までびっしりとしげったジャングルと、茶色に濁った河の流れにさからいながら、私たちの乗った大型カヌーは、ヤノアマ族インディオの国への旅を続けていた。

ベネズエラのアマゾン州の、サンフォルナンド・アタパボの町から上流では、文明が一日進むごとに急速にその影を失なっていく、一日に一・二軒のインディオの家を見るだけの世界になってしまう。このあたりのインディオたちから、ワイカ(人を殺す人)と呼ばれて恐れられているヤノアマ族は、ベネズエラ南部からブラジル北部の国境地帯にすむ狩猟民族で、文明に満ちた現在でも、ジャングルの奥深くひそんで、文明との接触をたたくな嫌、他部族との闘争にあけくるといわれている。かなりの人口と部族があると思われるが、その全容は不明である。

ヤノアマ族に接触するには、ベネズエラ政府の厳しい制約があつて、許可をとりつけるのは難しい問題が山積されてきたが、なんとか許可をとりつけて、ここまでオリノコ河をさかのぼってくるのに、一ヶ月もかかりました。サンフォルナンド・デ・アタパボを出てから四日で、ヤノアマ族の国に入ったのであつた。河巾が百メートルほどにせばまったオリノコ本流と、オカモ河の合流地点と、ここから一日さかのぼったマバカ河との合流点までの間に、三つのヤノアマ族の部落があつた。一週間という短かい期間ではあつたが、アマゾンの大原生林の中で、全裸で生きる彼等の生活の一端をのぞくことができた。カヌーのエンジンの音を聞いて現われた数

人のヤノアマについて、ジャングルにつけられた細い道をたどると、一瞬ジャングルがひらけて、目の前一杯に草薺の壁が出現した。そこにはおどろかさされた。シャボノと呼ぶヤノアマ族の共同大家屋である。その草の壁にあけられた小さな穴から、身をこごめて中にふみこむと、ヤノアマの裸の世界であつた。

ヤノアマ族は狩猟採集民であるから、その住居は移動のたびに建てかえられるのである。住居は簡単なものと思われがちだが、スケールとい造りかたとい立派なものである。好戦的民族であるヤノアマのシャボノは、

河岸から見えない場所につくられ、直径三〇センチから五〇センチほどの、巨大な円形家屋で、洗面器を伏せたような形をしている。内部に入るとその構造が良く理解できる。外側から見えた草薺の壁は、片面だけの屋根で巾一〇センチほどを覆っているが、その内側の円の中心



矢を作るヤノアマの父と子(マバカ1974)

部は、屋根のない円形の広場になつていて、陽光がいっぱいにさしこんでいる。この片屋根は三列の柱で支えられていて、一番外壁に近い部分が居住する場所、その内側が作業をする場所となつていて。居住区は一家族づつで燵を作りそのまわりにハンモックを吊つてあり、家族ごとの間にはなんの仕切りもないので、シャボノの間はだれの眼からでも一望に出来るのである。

アマゾンのインディオの大部分は、ハンモックを利用して空間を休めている。多湿で、アリ・サソリ・ヘビなどの攻撃から、身を守るのと健康管理の面からも、すぐれた道具といえる。ハンモックは、ヤシの繊維や野生のワタから編みあげられるが、ときには竹を細くさいたインスタントなものも造られる。

彼等の日用品といえば、この他に武器となる弓矢、背負い籠、土器とヒョータンから作られた食器類、骨や石などを利用した刃物などくらいしかみあたらない。

ヤノアマ族の男女は、ほとんど裸で生活している。衣服と呼べそうなものは、腰と腕にまわした細い紐と、ときおり女性が使用する腰巻きくらいのものである。腰の紐は重要な男性は性器の先端を、この紐に結びつけているし、女性の中には前面に房の下がつたかざりをつけている。ために成年の腰紐をほとんど見ようとしたら、かなりの恥かしさと抵抗を示したものであつた。裸ではあるが、身をかざるといふことには熱心のように、しきりにオノートとかアチヨテなどの植物の実をつぶして、赤や紫の色素で体のあちこちへべインティングをする。丸印はトラの模様とい

い、波線模様はヘビを表わすと説明してくれた。頭部は男女ともオカッパに刈つていて、その頭頂部を円形に毛を刈つてしまうのが、ヤノアマの特徴でもある。この他に男女とも耳たぶに穴をあけ、草花をかざり、女性では口の両端と下唇の下縁に小さな穴をあけて、細い棒(つまようじほどの)をさして、飾り

たてている。もちろん首飾りも好きである。ヤノアマ族の食生活は、すべて狩猟や採集によつてまかなわれ、男女の仕事の分担はしつかりと分けられていて、男は狩猟と武器の製作、女は採集と調理を受持つている。大きなものはバクからヘビなどの小型のものまでを狩りとり、クモや甲虫類の幼虫も好んでたべる。採集は草木の芽や根をあさり、小昆虫や薪を集めてくるのである。朝になると男たちは、カヌーに乗って獲物を求めて森で獣を追ひ、河へ魚を漁りに出かけ、女たちは森に入つて行く。食べられるものは、手あたり次第に食べるという感じである。

ヤノアマの部落に滞在中に、私が食べた目撃した食物は、サル・ノブタ・ネズミ・アリ・クモ・イモムシとナマズ・ピラニアなどの動物や、バナナやヤシの若芽、数種のイモなどであつた。

調理は必ず火を通して、焼くか煮るかして食べるが、寄生虫や病気の予防には当然である。野草や木の実は、口を使って細かくしたり、肉などは焼いたり煮たりしてから小さく分ける。一番重要な調味料の塩は、ジャングルでは産しないので、ある種の木の葉を燃やした灰を水に溶かし、それを煮つめて作るが、その塩味たるや私たちの塩味とはほど遠いすうすう味である。(写真家)

### 博物館だより

ライチヨウ寄付金  
一一〇〇〇円 茨城県水戸市

三の丸小学校4年4組一同  
五〇〇〇円 東京都練馬区南大泉五四〇  
藤田いさを殿

山と博物館 第23巻 第4号  
一九七八年四月二十五日発行  
発行所 長野県大町市TEL(四)〇二一  
大町市 岳博物館  
印刷所 大町市 後町 大糸タイムス印刷部  
定価 年額八〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号(長野)三三、二九三